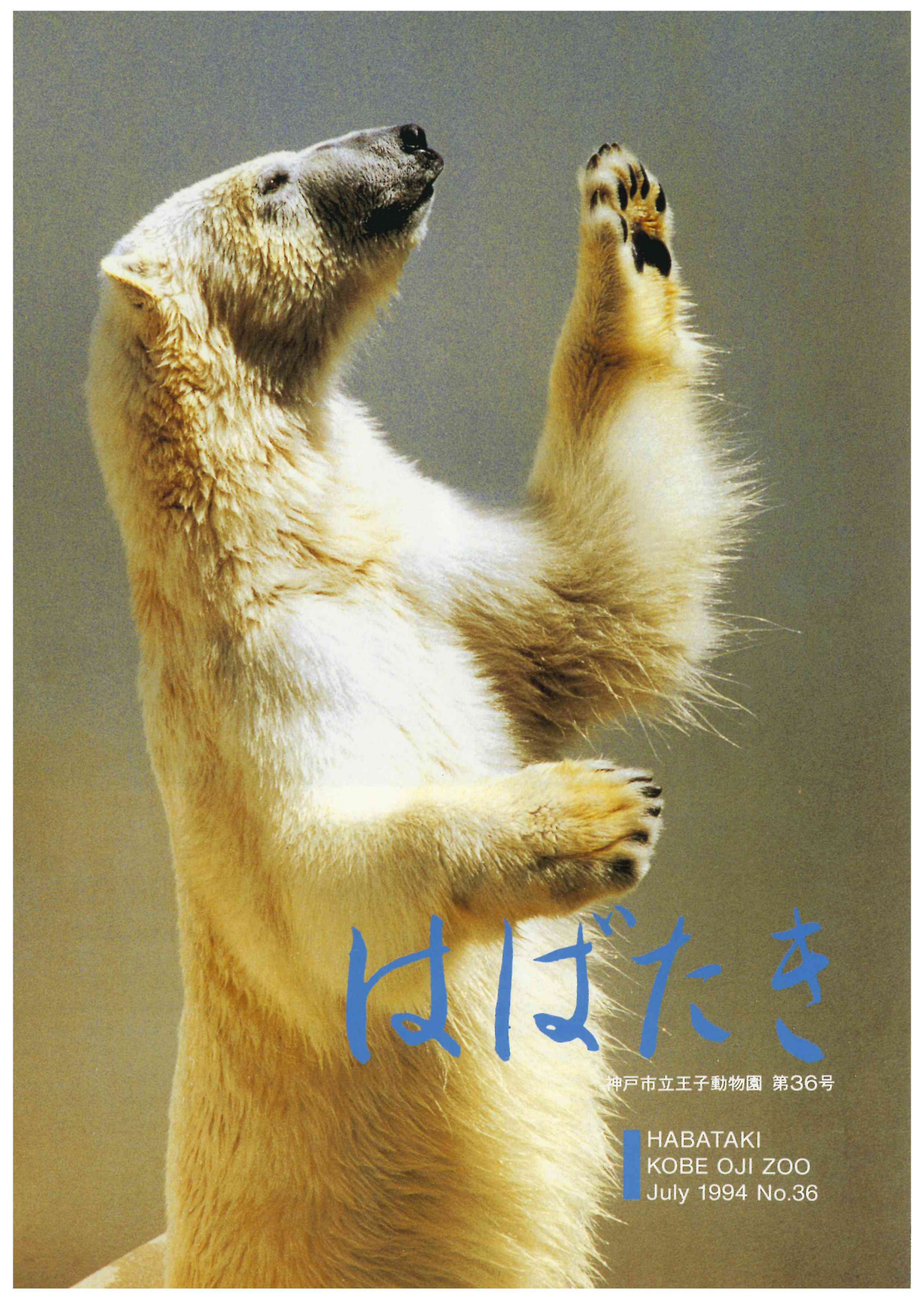




はばたき

神戸市立王子動物園 第36号

HABATAKI
KOBE OJI ZOO
July 1994 No.36



アフリカサファリ、雨期もまた楽し

動物写真家

田中 光常

初めてケニアを訪れた時「アフリカの水を飲むと、また、必ずアフリカへ戻ってくる」という、言伝えがあるということを聞きました。大分がぶ飲みしたせいか、もう二十回近くも訪れることができました。

今回はマサイ・マラ動物保護区内のガバナーズ・キャンプと保護区外側のマラ・サファリクラブの二カ所を根拠地にして、保護区の内外をサファリして回りました。この二カ所は車道以外でも車を乗り入れることができ、テント屋根に穴が開くほどの強烈なスコールがきて、道が川となり、草原が湖と化しても四輪駆動

車で一日も休まずサファリを敢行してくれる所なのです。

また、スコールの去った後は、青空が澄み切って、入道雲の素晴らしいことといったらありません。その下の芽生えたばかりの緑の美しい草原を子連れのゾウの大群、跳躍の名手インパラの大群を初め、草食獣レイヨウ類の大集団、それを狙ってチーターの家族、生まれて間もない赤ちゃんを連れたライオンのプライド、めったにお目にかかれないヒョウの雄姿等々、今まで訪れた中でも最高の収穫があったと思います。アフリカのサファリは雨期に限る、と、病みつきになりそうな今日この頃です。

面白半分にかけていた万歩計が、歩きもしないのに車に揺られた振動で毎日三回のサファリで軽く一万歩から二万歩を記録していて大笑いしました。



今号の特集

クマ

今年8月、待望のホッキョクグマ舎が新築され、ガラス越しに水の中を豪快に泳ぐ姿が見えるようになります。

今号は日本にも生息し、私たちとも関係が深いクマを特集しました。

目次 CONTENTS

[敬称: 略]

★ 表紙 ホッキョクグマ「アイス君」
撮影: 岸田一也

① 巻頭言
「アフリカンサファリ、雨期もまた楽し」
文・写真: 田中光常

② 表紙の解説
ホッキョクグマ
文・写真: 岸田一也
愛嬌たっぷりのホッキョクグマ。でも立ち上がると2mをこえる大型猛獣。新居が待ち遠しいよう～。

③ 飼育トピックス

④ 熱帯の楽園
文・写真: 川上博司

太陽の動物舎をリフレッシュ。新しい動物も仲間入りしました。
は虫類もじっくりみれば、かわいい!

⑤ クマ特集Ⅰ

⑥ 世界のクマ
文: 安田伸二 写真: 田中光常、芦田雅尚、谷岡正之

世界にはたくさんのクマがいます。クマの分類と生息地を世界地図に書き込んでみました。あなたはどれだけ知っていますか。

⑦ クマ特集Ⅱ

⑧ ホッキョクグマの生態と保護
文: 村田浩一 写真: 田中光常

雄大な氷原の中でホッキョクグマ。生態も勉強して……

⑨ クマ特集Ⅲ

⑩ 研究レポート「クマの繁殖生理」
文・写真: 坪田敏男(岐阜大学農学部)

ウマグマ(馬熊)の紹介
文: 権藤真禎 写真: 天津動物園提供
4コマまんが「ZOOっとタイムズ」No.2
漫画: 川上博司

クマの繁殖・生理の専門家のお話です。じっくり読んでみましょう。中国にいる「ウマグマ」ってどんなクマ? 「4コマまんが」。主役はやっぱりクマです。

⑪ 研究レポート

⑫ キリンファミリー
文: 大山裕二郎、川上博司

写真: 岸田一也、兼光秀泰
図表: 兼光秀泰

王子動物園では、これまでたくさんのキリンが生まれています。なんと40頭! これはすごい! その苦労話と自慢話 等々

⑬ 動物科学資料館の特別展

「動物園の裏側」～飼育係の1日～

文: 安宅範子
写真: 谷岡正之

動物の飼育係や獣医師はどんな仕事をしているのでしょうか。興味ありますね。おもしろい道具、動物園自慢の繁殖室も展示してあります。必見!

⑭ 最近のトピックス

「新ホッキョクグマ舎」完成間近!
金縷猴「点点」の来園、職員の市長表彰、無料休憩所の新築
文: 滝田政男、加納 至、渡瀬日司
写真: 岸田一也

★ 裏表紙 エゾヒグマの足の裏

写真: 村田浩一
編集後記
文: 滝田政男

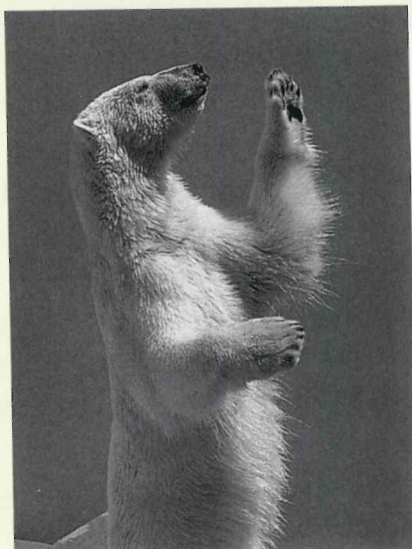
エゾヒグマの足の裏(原寸大)です。これでガーンとやられたら大変。

ワタリアホウドリ

(亜南極、サウスジョージアにて)

写真: 田中光常

表紙の解説 (撮影メモ)



ホッキョクグマ Polar Bear (*Thalarctos maritimus*)

「一番強い猛獣は?」と聞かれたら私は、即座に「ホッキョクグマ」と答えます。一見した所では、優しそうな瞳、おっとりした物腰、全身が白く長い毛で覆われ温かそうな雰囲気漂わせています。しかし、300kg近くある体重、太い四肢には丈夫な爪をもち、百獣の王ライオンと比較しても一回りも大きい体格、それにもまして、長い厳寒の冬を生き抜く行動力・体力を兼ね備えています。

また、食性を見ても肉・魚・果物・野菜・貝・海草などありとあらゆる

ものを食べ、食べないものを探すのが難しいほどです。その上、泳ぎも得意で野生のものでは、水中のアザラシを捕食することもあります。

さて、表紙のアイス君、メスのみゆきちゃんと同じ四才の若獣でそろそろ大人の仲間入りをしようとする年頃です。係員を見つけ愛嬌いっぱいに立ち上がりました。8月には新居も完成し、産室もつくりましたので、日本生まれ同志の若いカップルに一日も早く可愛い赤ちゃんの誕生をと期待しています。

文・写真 岸田一也



熱帯の楽園

——太陽の動物舎——

動物園の北西に夜行性動物・は虫類・熱帯鳥のパラダイス「太陽の動物舎」があります。

そこは、年中室温30℃の温室。極彩色の小鳥たちがガジュマルの間を飛びかい、1日2度の人工スコールが降るまさに「熱帯雨林」です。



太陽の動物舎

さて、入口すぐの大水槽には、東南アジアの珍しいワニ、ガビアルモドキ、その次の水槽には、南米アマゾンのワニ・カイマンたちが魚たちと一緒に生活しています。まるで、アマゾン河を切り取ってきたようです。

このワニたちは、太陽熱の働きで室温32℃、水温28℃の快適環境でくらしています。



ガビアルモドキ



カイマンとイグアナ

そして、南米の怪獣・グリーンイグアナと珍しいカメ・マタマタ…。グリーンイグアナは草食性ですから、魚を食べるマタマタとの争いはありません。

ヒョウモンガメ・ホウシャガメ・アカアシガメなどの陸ガメと、日本では、静岡の動物園と当園だけで飼育されている珍しい鳥、ヒロサンショウクイが同居しています。

巨大なヘビ、ビルマニシキヘビと、日本産のヘビたちのいる、は虫類コーナーもあります。



有 鱗 目 オオトカゲ科
ミズオオトカゲ
 Water Monitor
Varanus salvator
 南アジア・東南アジア
 国の保護対象動物種

温室のガジュマル



温室の住人・ミズオオトカゲ



コモンマーモセット親子

その先は、暗闇の世界「夜行性動物」のコーナー。
 洞窟のような入口を入ると、小型の夜行性のサルたち、
 オオコウモリの大群の歓迎や、反対に私たちが観察し
 ているフクロウなどなど。

やっとの 思いで洞窟をぬけると、汗が吹き出す熱
 気、そこは熱帯雨林。ナマケモノが木からぶら下がり
 足元にはミズオオトカゲが……。

木々の間を飛びかう熱帯鳥の美しさに、流れる汗を
 ぬぐうのも忘れます。



リクガメ

**この興奮の
 熱帯雨林を
 君も体験してみては？**

クマ特集 I 世界の



ヒマラヤグマ (ツキノワグマ)



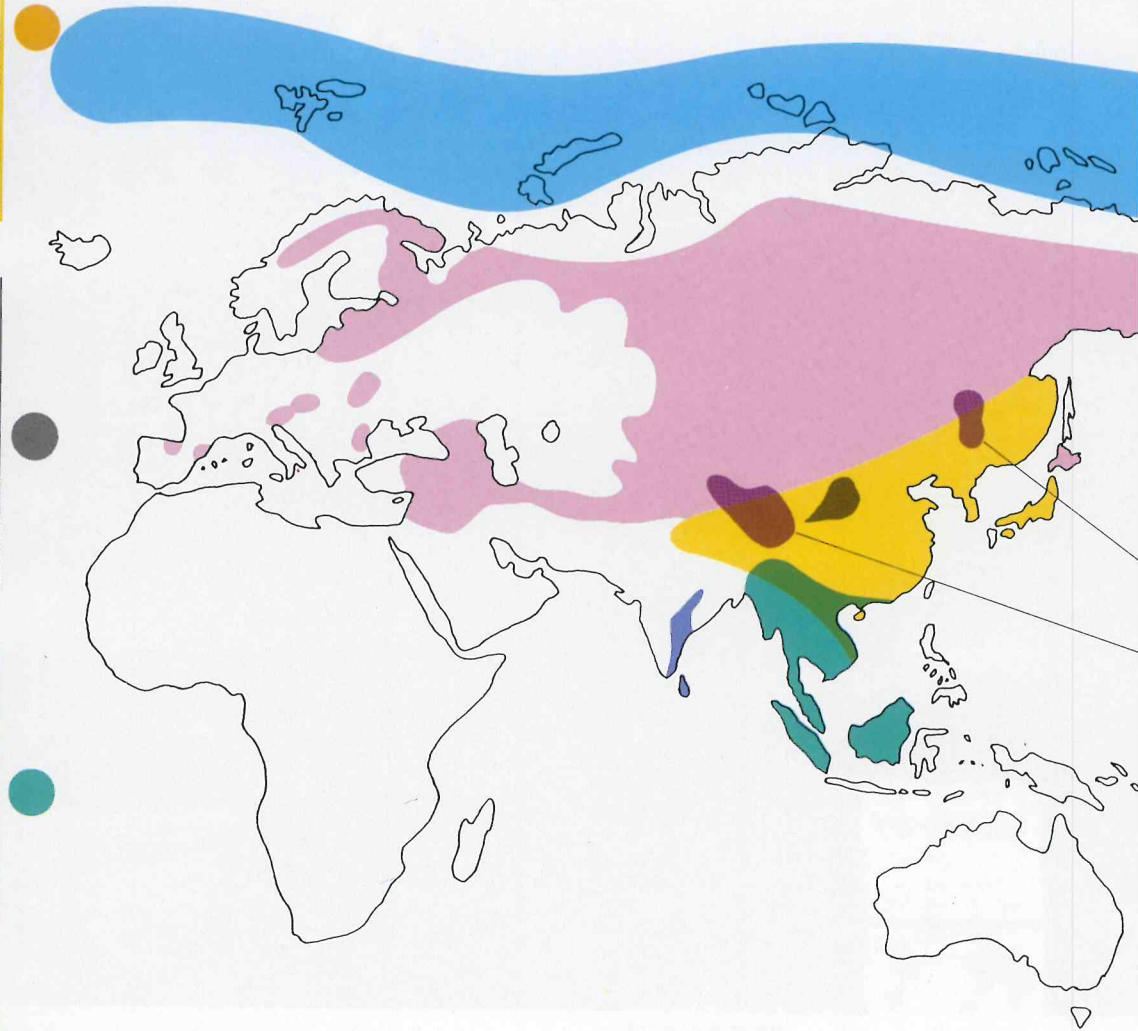
※ジャイアントパンダ



マレーグマ



ナマケグマ



※写真の色分けと生息域の色は対応しています。

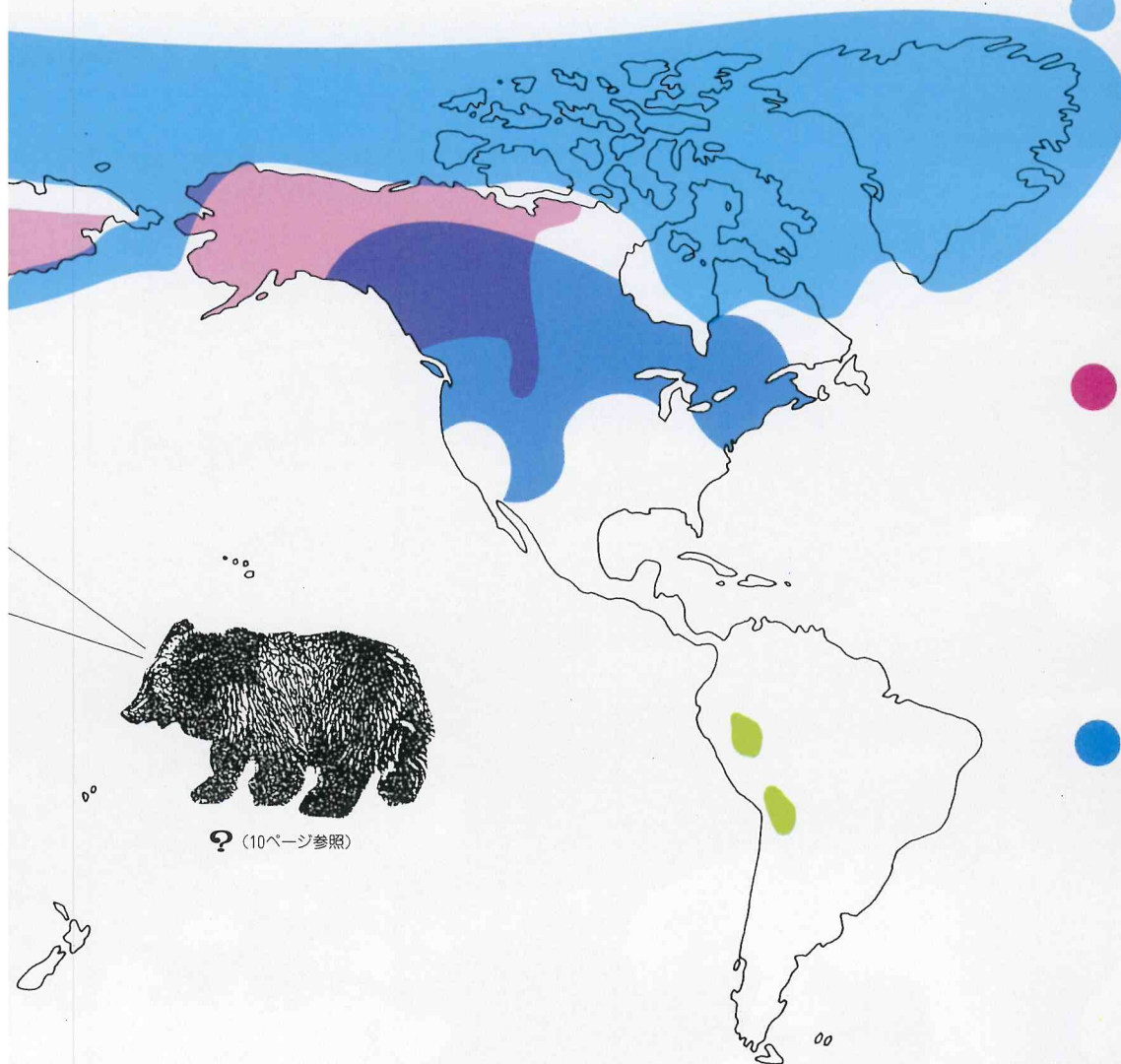
クマの分類

食肉目 ———— クマ科
Carnivora ———— Ursidae

- メガネグマ Spectacled Bear *Tremarctos ornatus*
- ヒマラヤグマ(ツキノワグマ) Asian Black Bear *Selenarctos thibetanus*
- アメリカクロクマ American Black Bear *Ursus arctos*
- ヒグマ Brown Bear *Ursus americanus*
- ホッキョクグマ Polar Bear *Thalarctos maritimus*
- マレーグマ Malayan Sun Bear *Helarctos malayanus*
- ナマケグマ Sloth Bear *Melursus ursinus*
- ジャイアントパンダ Giant Panda *Ailuropoda melanoleuca*

※ジャイアントパンダは、クマ科に入れる説とパンダ科として分類する説に別れています。

クマ



ホッキョクグマ



ヒグマ



アメリカクロクマ



メガネグマ

「Grzimek's Encyclopedia」に基づく

クマとは？

クマは、北極、南北アメリカ、ヨーロッパ、北アフリカ、アジアに生息します。体の大きさは、最大種のホッキョクグマ、ヒグマなどでは体長280cm、体重 500kg にも達し、陸上にすむ食肉類中最大の種です。食性は、雑食性で果物、木の実、昆虫、魚、肉など食べないものをさがすほうが難しいぐらいです。視覚、聴覚は、あまり発達していませんが嗅覚はよく発達しています。歩き方は、ヒトと同じで足の裏全体を地面につけて歩きます。寒冷地に生息するクマは、寒さが厳しくなる前にたくさん食べ皮下脂肪を蓄積し単穴に入り「冬眠」あるいは「冬ごもり」します。しかし、食べ物がある暖かい地方にすむマレーグマ、メガネグマ、ナマケグマ等は冬眠しません。クマが、ヒトを襲ってケガをさせるという事件がまれに起こりますが、これらの多くは、歩いていて不意に出会ったり、子グマを守るために取る行動です。一方、毛皮、肉、胆のうを取るため多くのクマが捕獲され、さらに、開発による生息域の減少がヒトとのトラブルを引き起こし害獣として駆除され、近い将来絶滅の危険性もあります。



クマ特集Ⅱ

ホッキョクグマの生態と保護

●体のとくちょう

ホッキョクグマは、陸上最大の肉食動物です。雌の体重は150～300kg、雄では500kgを超えることもあります。ホッキョクグマの毛は白いため、一般に「シロク

マ」とも呼ばれますが、夏になると少し黄色みがかった毛色になります。これは、太陽の光による化学的変化(酸化)のためと考えられています。



ホッキョクグマの親子
(カナダ、ハドソン湾チャーチル岬にて)

写真：田中光常

かれらがすんでいる北極圏は、冬の寒さがとてもきびしい所ですが、密生した毛と厚い皮下脂肪が、寒気から身を守っています。また、足の裏にも毛が生えて

いて、氷上を歩くときの保温とすべり止めの役目をしています。耳は他のクマの仲間と比べて短く、体温が逃げるのを防いでいるようです。

かれらは、泳ぐのも、潜るのも、とても上手です。前足は幅が広く、これをボートのオールのように動かして、海を時速7kmもの速さで進むことができますし、65km以上の距離を泳いだという記録もあるほどです。

●くらしと繁殖

ホッキョクグマは、ふつうは単独でくらしていますが、繁殖期になると雌雄が一緒にいることがあります。また、よい餌場にたくさんのクマが集まることもあります。おもな食べものは、アザラシ、トナカイ、魚、そして植物などです。待ち伏せをして、呼吸のために氷穴から顔を出したアザラシをつかまえたりもします。大きな体をしていますが、とても敏しょうで、狩の名手なのです。

交尾期は、3月から6月で、妊娠期間は受精卵の着床遅延(10頁を参照)のために195~265日と長くなります。妊娠した雌はトンネルのような巣穴を掘り、11月から1月の冬期に1~4頭の子どもを産みます。生まれたばかりの子グマはとても小さくて、体重が600gほどしかありません。3月から4月頃まで、子グマは母親と巣穴の中ですごし、穴を出てからも2年間は一緒に行動します。

性成熟は5~6歳で、野生では20年以上の寿命があると考えられています。飼育下では、38年2カ月も生きた記録があります。

●保 護

ホッキョクグマは、その良質な毛皮のために、過去にたくさん狩猟されてきました。カナダでは1970年代に、1年間で530枚もの皮が取引されたことがあるそうです。アラスカでは、飛行機やスノーモビルを使った狩猟もさかんにおこなわれ、生息数がかなり減少しました。野生動物を保護するための法律がつくられてからは、しだいにその数も増えてきましたが、現在でも天然ガスや油田の開発などで生息地がせばめられており、決して安心はできません。とくに出産のために適した場所が少なくなってきたのが問題となっています。

国際自然保護連合(IUCN)のレッドデータブックや、希少野生動物の商取引を制限するワシントン条約では、保護が必要な動物として扱われています。このため、世界中の動物園が協力して、飼育下の繁殖をすすめているところです。





クマ特集Ⅲ

研究レポート

クマの繁殖生理

坪田 敏男（岐阜大学農学部）

アラスカのヒグマ

アラスカの大地を悠々と歩くグリズリー。川の真ん中に陣取って上がってくるサケを待ち構えるクマの集団。雪の上でじゃれ合う愛くるしい子グマ。氷に閉ざされた北極海でアザラシを襲うホッキョクグマ、等々。そんな姿を1度はテレビで見たことがあるのではないのでしょうか。

クマの生活ぶりは、四季折々にドラマチックな変化がみられます。春には冬眠からさめたばかりの重い体を揺り動かしながら草や木の芽をはむ姿。夏には交尾相手を求めて活発に動いている様。秋には差し迫ってくる冬の到来に備えてひたすら木の実をむさぼる光景。冬は穴の中でじっとくるまって眠っている姿など、野生に生きるクマの暮らしぶりを想像してみてください。なんと神秘的な動物だと思いませんか。ここではその神秘的なクマの生態の中で、繁殖の生理メカニズムについて皆さんに紹介しましょう。

※

クマ類の交尾期は主として初夏にやってきます。元来クマ類は群れを作らずに普段はほとんど単独行動を好みます。しかし、この季節だけは他と違い、雄と雌がつがいを作り、数日から数週間にわたって行動を共にします。もちろんこの間に交尾をし、次の世代の誕生を待ちます。雄のクマが繁殖に関わるのは全くこの

時だけです。といっても、雄グマは交尾期間中にだけ繁殖にエネルギーを投資するのではなく、長い間の準備期間が必要です。交尾期からさかのぼって半年くらい前の冬眠期間中に既に精子を作るための準備が始まっていることが、最近になってわかってきました。しかも交尾期間中は交尾相手を求めて長距離を移動し他の雄との交尾相手の争奪戦を繰り広げているのです



着床遅延中の
受精卵

から、必ずしも雄が楽をしているというわけでもないのです。一方、雌グマは交尾以後についてはすべてをうけ負います。即ち、受精、着床、分娩そして哺育といった一連の経過が雌グマによって行なわれます。着床とは、あまり聞き慣れない言葉ですが、受精卵が母体の子宮に接着して胎子発育の開始点に当たる現象のことです。クマ類では、この現象にちなんで特徴的なことがあります。即ち、交尾をした時点で雌からの精

子と雌からの卵子が雌のからだの中(卵管)で出会い受精は起こるのですが、その後しばらくはこの受精卵が发育を停止するのです。といっても厳密には、子宮の中で何らかの刺激を受けて受精卵は生存しながらゆっくりと发育を続けています。この受精卵の生存を維持するために、卵巣からプロジェステロンとよばれるホルモンが分泌されていることがわかっています。このような現象が数カ月も続き着床の時期が遅れるので、これを着床遅延とよんでいます。実際の胎児の发育はほぼ冬眠にはいる時期(11月下旬または12月上旬)に一致して始まります。その後は急激に发育をし、約2カ月で分娩(出産)します。この分娩もクマ類においては特徴的で、雌グマは冬眠中にこれを行います。おそらく出産のためにエネルギーをあまり使いたくないのだと思います。その結果、新生児はとても小さく(ヒグマで約450g)、未熟児の状態で生まれてきます。生まれ出た子グマは冬眠している母グマの、脂肪をたっぷり含んだ濃厚なミルクでぐんぐんと大きくなり、春には母グマにくっついて歩けるくらいにまで成長します。「小さく生んで大きく育てる」、これがクマの子育て法なのです。



馬 熊 ウマグマ



ウマグマは中国に生息するヒグマの地域亜種として知られていますが、中国の動物園でもあまり飼育されていない珍しいクマです。

中国に生息しているヒグマは、中国の東北地方に分布する東北亜種(*Ursus arctos lasiotus*)、新疆ウイグルの天山山脈に分布する天山亜種(*Ursus arctos isabellina*)とウマグマと呼ばれる青蔵亜種(*Ursus arctos pruinosus*)がいます。

ウマグマの生息地域は、青海省やチベット高原の海拔4,500~5,000mの草原や砂漠地帯、四川省にかけての山地です。ウマグマは他のヒグマより少し小さく、顔の毛色は茶褐色か紅褐色で、老齢個体は被毛の色が白っぽくなるそうです。

胸から首にかけての白色の部分がハッキリしています。四肢は通常黒色ですが、白っぽくなるものもあるようです。爪の色は白く、ヒグマと違うところです。1853年 E.Blyth がヒグマの亜種の *U. arctos pruinosus* として最初に紹介しました。

Pruinosus とは霜のように白という意味で、他のヒグマに比べて老齢個体は身体全体が白くなるために付けられたとのことです。

王子動物園で飼育展示しているクマはエゾヒグマとニホンツキノワグマとホッキョクグマの三種類だけですが、できればこの珍しい中国のウマグマを皆様に見ていただきたいと、友好都市の中国・天津市の動物園をお願いしております。天津動物園では現在雄、雌2頭を飼育していますので、繁殖すれば贈呈していただけるものと期待しています。現在、日本動物園水族館協会に加盟している動物園では未だ飼育されていませんので、王子で展示できれば人気者になってくれるでしょう。



ZOOっとタイムズ

No.2

クマさんは、無表情で
気持ちが分かりにくくて、
飼育係泣かせです。



美味しい物を食べても
少しもうれしそうではあ
りません。



1⇒2
3⇒4

しかし……?



やっぱり、表情はあるのです。
……………



キリンファミリー 王子動物園一の大家族



はじめに

王子動物園で1番の大家族は何か、ご存じですか？
実は、キリンのファミリーなのです。飼育している種類は、キリンの中で最も大きなマサイキリンで、1967（昭和42）年に初めて来園しました。野生のキリンの食べ物は、木の葉（主にアカシヤ）や小枝が主ですが、時には花や果物、草なども食べます。動物園の中では、青草や乾草、人参やキャベツ、草食獣用の固形飼料など、栄養のバランスの良い食べ物を与えています。

当園ではキリコ、コズエ、ミネコという3頭の雌が25歳と言う年齢にも負けずに元気で生活し、ミネコは昨年雄の子ども（ケンゴ）を産みました。ケンゴより少し早く生まれたカズを入れて、現在8頭の家族がくらしています。

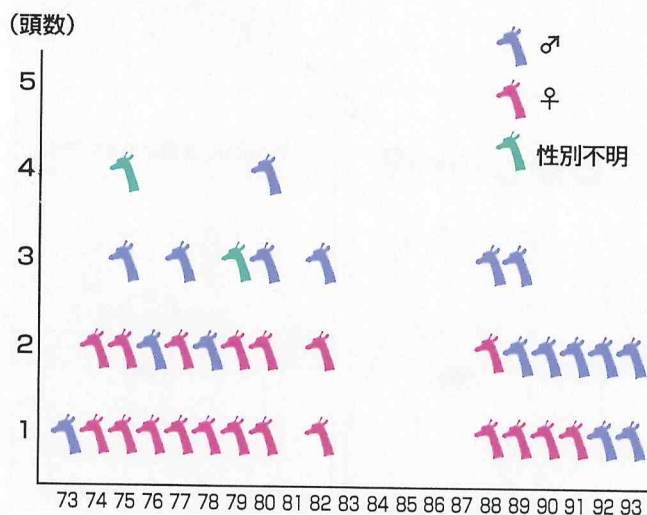
その数なんと40頭！

キリンは一般的に、他の動物の出産に比べて難産のことが多いようです。しかし、当園では、タカコという雌が初めて子どもを産み、その後来園した3頭と共に、現在まで40頭もの子どもを産みました。40頭の出産は、1973（昭和48）年から1993（平成5）年まで見られました。その中には残念ながら産まれてすぐ死んでしまった子どもや、産まれながら足が弱く、母親のお乳をうまく飲めないために死んでしまった子どももいて、飼育係も大変悲しい思いをしました。それら以外の子

どもたちは、現在残っているカズや、ケンゴと同じように元気一杯に走り回りすくすくと育ちました。

しかし、当園の年別繁殖頭数を見てみると1983（昭和58）年から1987（昭和62）年の間、出産が全くない年があります。これは父親キリンのナガオという雄が死亡し、若い雄のキリンだけになったためだと考えられます。また、1987（昭和62）年から子どもの生存率の低下が見られます。これは母親の老齢化が原因と考えられます。

当園の年度別繁殖頭数



○キリンのお産あれこれ

最初のにべましたが、キリンの出産は難産のことが多いようです。5m余りの長身で前足も後足も長く、その上妊娠期間が450日もあります。飼育係は、交尾観察から出産時期を推定し、出産準備をするのですが、1週間くらいの誤差を生じることがあります。せっかく出産準備のためキリンを分娩室に収容しても、早すぎると不安がり、遅いと分娩室以外で出産が開始されてしまい、時期を予想するのには大変神経を使います。

キリンは通常立ったままで出産します。足も長いキリンのことですから、出産時には、2m以上の高さから落下することになります。しかし、赤ちゃんキリンは柔道の受身のように、肩から回るように着地します。

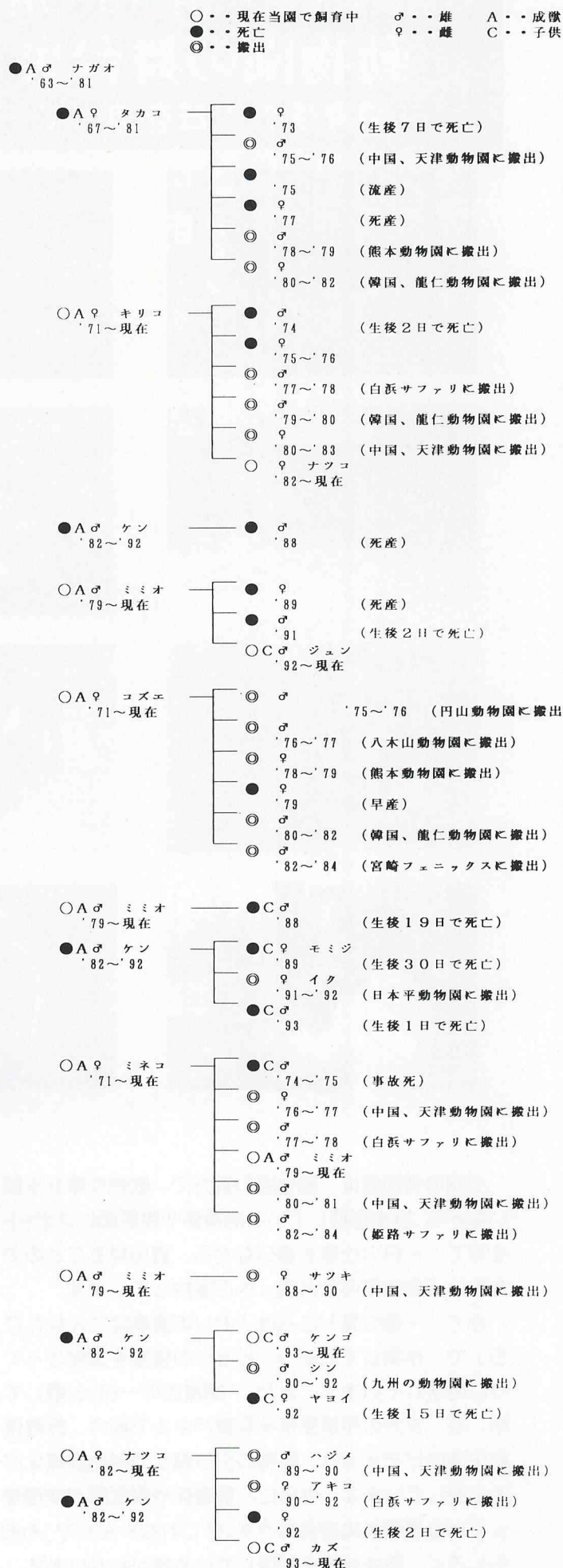
当園では飼育係が多くの出産に立ち会ってきましたが、それでもまれに日中展示場で出産が開始され、飼育係より先にお客さんが発見・通報してくれたこともありました。お子さんを連れなお母さんなどは、わがことのように心配し応援してくれました。こんな赤ちゃんキリンが起立し歩みはじめ、母親のキリンのお乳を一心不乱に吸い始めたのを確認すると、今までの苦労も吹き飛びます。

キリンは動物園の人気ものです。私たちは王子動物園のキリンファミリーが国内外の動物園の一員として1頭でも多く迎えられよう努力していきたいと思えます。



屋外でのキリンの赤ちゃん誕生シーン！
(王子動物園にて)

王子動物園のキリンファミリーの家系図



特別展開催中！ 3月19日～9月6日
「動物園の舞台裏」
 ～飼育係の1日を追って～



今回の特別展は、動物園の裏方で、動物の幸せを願いながら、日夜奮闘している飼育係や獣医師にスポットをあて、一日の仕事を追いながら、普段見ることのできない「動物園の舞台裏」へご案内しています。

さて、一番の見どころは「おりの裏側はこんなところ」で、作業しているウンピョウの寝室を実物そっくり再現しています。また、「飼育係の一日」と題して、朝、昼、夕方の作業風景を写真パネルで紹介、飼育係総出演のビデオでは、動物の引っ越しや脱出訓練などを上映しています。さらに、飼育係や獣医師が実際に使っている見慣れぬ道具のクイズ「これな～んだ？」もおもしろく、意外な物を利用している事がわかります。

その他、「動物園の台所」「うんこは語る」「動物たちの引っ越し」「繁殖賞」のコーナーなど実物、写真、剥製などを用いて楽しく紹介しています。

「へえー、こんな仕事もしているんだね。」と飼育係や獣医師の仕事に少しでも興味を持っていただき、さらに動物園への関心と理解を深めてもらえれば、と願っています。

動物園の動物は、自然から預かってきた大切な宝物。これらの動物たちが、いつまでも元気で幸せに暮らせるように、今日も飼育係は、優しい心で動物たちの世話をしています。



最近のトピックス

金絲猴の『点点』が来園しました

父親の『壮壮』^{チャンチャン}、母親の『雯雯』^{ウェンウェン}、王子動物園生まれの『愛愛』^{アイアイ}の金絲猴ファミリーに、平成6年3月16日新たにメス『点点』^{テンテン}が仲間入りし、にぎやかになりました。4頭の金絲猴を飼育・展示しているのは、中国以外ではここ王子動物園だけです。

これは平成4年5月から続けてきた神戸市、中国・天津市、中国野生動物保護協会の三者による日中共同研究の結果、中国以外の国では世界で初めて赤ちゃんが誕生するなどの成果があったので、希少動物である金絲猴をもっと増やしていこうとの合意によるものです。

また、金絲猴は西暦2002年まで王子動物園にいたことになりましたし、4頭はとても仲がいいので、次の赤ちゃんの誕生を心待ちにしています。

「新ホッキョクグマ舎」完成間近!

王子動物園は、平成元年度から再編整備計画に取り組んでいますが、今年の8月には待望のホッキョクグマ舎が完成します。

新しい獣舎は、ホッキョクグマが生息している場所の情景を、できるだけ自然に近い状態で再現しました。

人工の滝、そこから飛び散る水しぶき。運動場も広くなり、深さも増したプール。その中でホッキョクグマたちはどのように生活し、泳ぐのでしょうか。ガラス越しに水中生態が観察できるようにしています。そ

飼育係職員が市長表彰を受賞しました

平成5年4月21日金絲猴のメスの赤ちゃんが当園で誕生しました。これは中国以外の国では初めての繁殖です。この赤ちゃん「愛愛」は飼育係の期待に応えてすくすく成育し、希少野生動物の保存事業に寄与することができました。このことが評価され、平成6年3月14日、笹山幸俊市長から飼育係全員表彰されました。また、(社)日本動物園水族館協会長からも繁殖賞を得ることができました。

無料休憩所をつくります

現在の建物は昭和初期に建築され、歴史を感じさせるものです。その外観を残し、内部を空調完備の近代的な無料休憩所として改修中です。年内には完成しますのでご利用ください。前庭は引き続き日本庭園として整備していく予定です。

—工事順調 急ピッチの仕上げ—

のため、プール水をきれいに保つ装置も完備しました。

運動場の岩組みは、世界でも有数の擬岩を造っているアメリカの業者が来日して施工したものです。

このような設備のホッキョクグマ舎がある動物園は、日本ではほとんどありません。皆様に喜んでいただけ、ホッキョクグマたちにも快適な獣舎になることでしょう。産室も出来ましたので、かわいい赤ちゃんの誕生が待たれます。



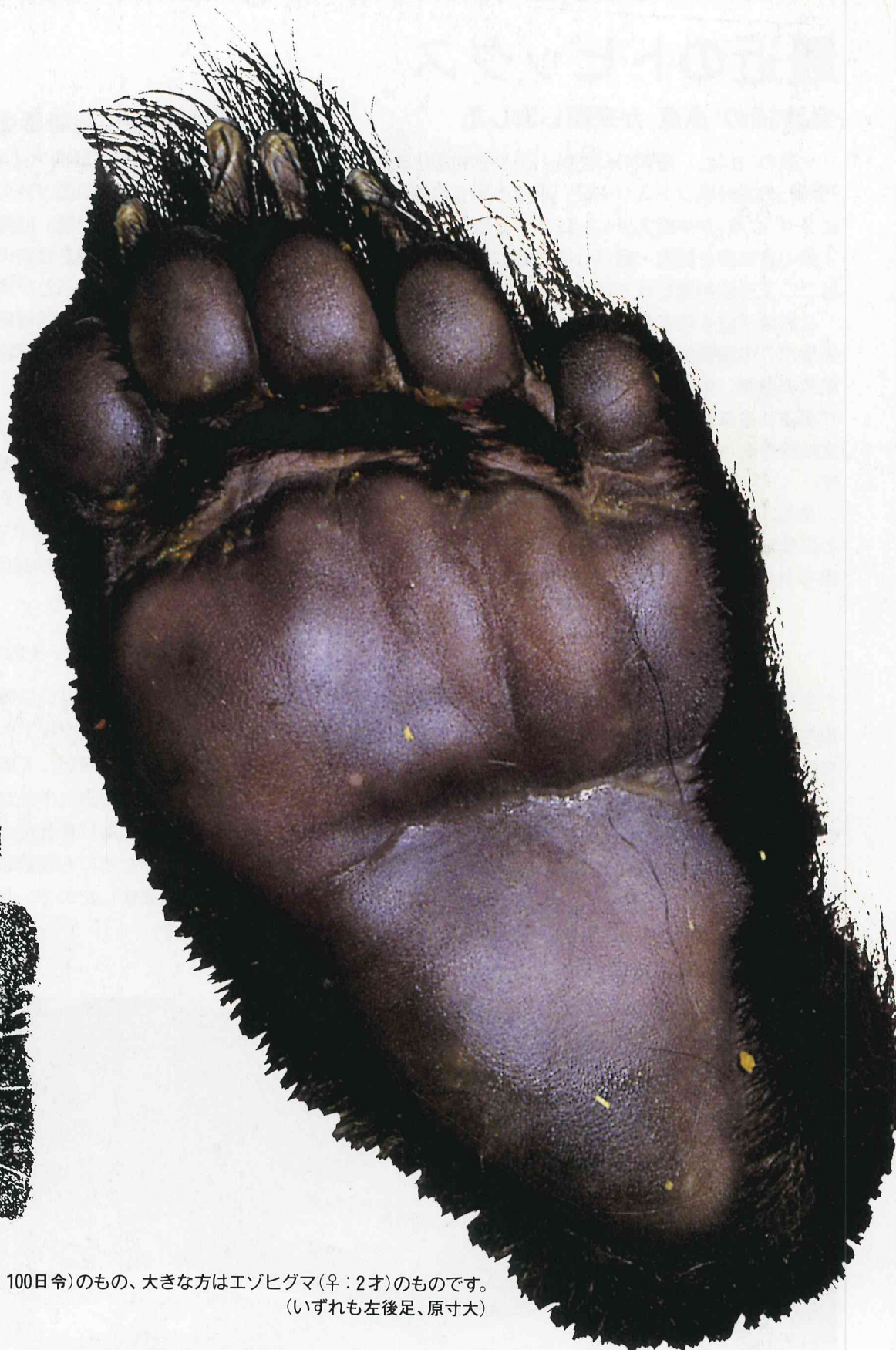
編集 後記

王子動物園は今、再編整備計画の真っ最中です。昨年完成しましたアシカ池に続き、今年の夏から秋にかけて『ホッキョクグマ舎』、『無料休憩所』が出来ます。すばらしい「ホッキョクグマ舎」の完成を目前にひかえ、今号は『クマ』を特集しました。なお、はじめての試みとして、外部の方に写真と原稿

を依頼しました。田中光常、坪田敏男の両先生には大変お忙しいなか快く引き受けていただきました。紙面を借りて、厚く御礼申しあげます。

この『はばたき』が、より多くの方々に王子動物園に来ていただくきっかけになればと願っています。

(編集委員)



小さな足型はヒマラヤグマ(♀:100日令)のもの、大きな方はエゾヒグマ(♀:2才)のものです。
(いずれも左後足、原寸大)

は ば た き 第36号

平成6年7月20日

編集 神戸市立王子動物園 ☎(078)861-5624

発行 (財)神戸王子動物園協会 ☎(078)801-5711

神戸市灘区王子町3丁目1

印刷 アイテム ジャパン

定価 200円

